

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町 198-3
電話 (043) 485-1801

ラグビーへの憧れ ----- 小田 眞二 熊との出会い ----- 阪井 二郎
歌のこころに学ぶ ----- 中村 一郎 与太郎の短歌 ----- 藤田 恭

世界遺産ヴェネツィアを訪ねて

鶴澤和良

2011年の7月にイタリア旅行に参加する機会を得た。イタリアには歴史も古く世界遺産に登録されている地区も多いので、以前から興味があつた。そこで、今回は旅行先の一つである世界遺産ヴェネツィアについて紹介したい。

ヴェネツィアは、中世に繁栄を極めた海運国家ヴェネツィア共和国の文化遺産を色濃く受け継ぐ街である。あの『ベニス商人』の舞台となつた所としても知られている。街全体が、アドリア海深奥部の湾にできた干潟の上に築かれている。そして大小の運河が縦横に走り、百を超える小島から成る水の都である。

2011年の7月にイタリア旅行に参加する機会を得た。イタリアには歴史も古く世界遺産に登録されている地区も多いので、以前から興味があつた。そこで、今回は旅行先の一つである世界遺産ヴェネツィアについて紹介したい。

な装飾が目を引き。また、宝物室にある十字軍の戦利品など至る所でヴェネツィアの繁栄ぶりを伺い知ることが出来る。広場での見学を終えた後、ゴンドラで運河を巡り、水上からの風景や文化遺産の見学を楽しむことにした。街は小運河によって仕切られ、小さな島々からできている。多くの建物が運河を挟むようにして立ち並んでいる。人々が水運と密接な関わりを持って生活してきた様子を見て取れる。その景観は水の都ならではの美しい生活空間を作り出していた。大運河を結ぶリアルト橋、かつて宮殿と牢獄を結ぶ役割をしていた「溜息の橋」、『東方見聞録』で知られるマルコポーロの家などを見学し、ヴェネツィアの旅を終えた。世界の歴史の中で繁栄を誇つた水の都の、日本にはない文化遺産や美しい景観に触れることができ、有意義な一日だった。

(編集委員)

ラグビーへの憧れ

私が初めてラグビーを意識したのは、50年前の中学3年生の頃、石原慎太郎原作のテレビドラマ『青年の樹』の一場面を見た時である。主演の勝呂誉が演ずる東大生が泥臭くて、カッコ良くプレーしていたのが印象的であった。

翌年高校に入学した私は、早速ラグビー部に入部した。創立2年目の県立高校であったが、青年監督のスパルタ指導の下、猛練習に明け暮れた。当時長崎県下で7連覇を誇っていた長崎工業高校を激戦の末に破り初優勝したのは、青春の輝かしい思い出である。その後、社会人となり勤務していた企業で、ラグビー部創設の話が盛り上がった。最初は経験者5名、その他の運動経験者十数名のほぼ素人集団である。年長者の私が監督の大役を仰せ付かった。創部3ヶ月目の最初の試合は、同

業の日本リースとの対戦であった。結果は50対0のボロ負け。おまけに2名の骨折者を出し、翌日人事部に謝りに行く始末。それで一念発起し、人事課長と結託して、翌年ばかりのラグビー経験者5名を採用する事とした。新卒5名の強力な戦力の効果は流石に絶大で、すぐに業界ナンバーワンに成長した。

それからほとんどん拍子に昇格し、関東4部リーグに所属する迄になった。同時に、ロートルの私はプレイヤーの第一線からは引退させられてしまった。その後は専ら会社のラグビー部の応援と、秩父宮ラグビー場で行われる母校大学の試合の観戦を楽しんでいる。

2019年に、日本でラグビーワールドカップが開催されることになった。ジャパンの活躍を切に期待している。

(宮前 小田 眞二)

熊との出会い

私が初めて野生の熊と出会ったのは、今から五十年前である。当時私は北海道でダム建設に従事し、そのダムも前年完成し、十数人が残っているだけでダム近辺の自然も昔の姿に帰りつつあった。

10月、私が宿舎に帰るため事務所を出たのは夕暮れ時、空はどんよりと曇り今にも雪の降り出しそうな冷たい風が舞っていた。歩き始めて5分、私はふと異様な臭気を感じた。かつて動物園で虎やライオンの檻の前で嗅いだ臭いである。道の右はすぐ川、左は道から少し低くなっているが背丈2メートル程の笹藪が広がる。風が吹く、風に沿ってうねる様に笹がなびく、はっと立ち止まった私に正面から風が当たる。二度目の先の所に迫って来た。笹の間から黒い動物の目が光っている。「熊だ」

そう気づいた時私の頭の中は真っ白になった。逃げなければと思っても足が動かない。「体が固まっている」状態である。3秒4秒：ふと熊の目が動いた。と私の背後で車の音がした。熊は途端に笹をかき分け奥の雑木林に消えて行った。

私の横に車が止まった。会社の車で運転手が「どうしました。宿舎まで乗っていきませんか」と声を掛けてきた。この時やっと私は平常心に戻った。「くー熊が出たよ」「じやー早く乗って」

宿舎に着いて色々質問が出た。「大きかった?」「よく解らない。だけど笹の下から熊の目が光っていた」「恐かった?」「そりやー」さすがに私は一歩も動けなかったとは白状出来なかった。

私の初めての熊との出会いは爛々と光る鋭い目と猛烈な臭気の非常に厳しいものであった。

(王子台 阪井 二郎)

歌のところに学ぶ

歌は世につれ、世は歌につれ：といわれるように、歌は世代・世相を最もよく表しているものの一つといえる。

人々から愛され、親しまれ、口ずさまれて、やがて忘れられて消えて行く、これも歌である。この歌にも千差万別、明るいもの・暗いもの・悲しいもの、力強く迫力あるもの、楽しくウキウキするものなどさまざまである。それが故に、人々のところを捉え、人々の生活の潤いとなり、人々の感情をくすぐるのである。

何気なく口ずさむ歌のなかから学ぶことが少なくないことを知らされる。

「男ごころに男が惚れて、意気がとけあう：」なんと美しい友情であろうか、ほのぼのとした気分させられる。この歌のころを心がけたいものである。

「貴様と俺とは同期の櫻：

みごと散りましょ国のため」
なんとも勇ましいが、家族のため、国のために想う一途な日本の男の心意気・友情・絆が伝わってくる。この歌の決意・勇気を学びたい。

「僕ら離ればなれになろうともクラス仲間はいつまでも：」
素朴で純粹で永遠の友情を願う「一心」に感動させられる。この「一心」を子供たちに伝えて、学校の「いじめ」を一掃したいと切に願う。

「雨よ降れ降れ悩みを流すまで」
苦しい心情から脱け出たい想いが理解できる。このようになんとなく口ずさむ歌のなかの「ころ」をこれからも学びたい。

(西志津 中村 一郎)



与太郎の短歌

暖かき 春の陽待たず
寒ツバキ

なぜ冬空に
咲くや花ごころ

銀行へ ニット帽とマスクで

視線浴び
マスク外して

年金おろし

初蠅はつへの もみ手にほだされ
いじらしく

打うつ気も失うせて
日向ひなたに眺むる

湯につかりなぜか目を閉じ

「ああ」と云う
至福の放心

無上の安らぎ

吹き上がる 見知らぬ店の
レジ袋

つむじ風の中
おどけて舞い見せ

吾の前 導くように
鳩歩き

急げば速く
止まれば振り向き

蚊取り器を つけても落ちぬ
蚊の居りて

腕を差し出し
止まらせて打ち

餌えに集う くちパクの鯉
位置競い

AKBもどきに
センター取り合い

紋もんしりょう白蝶 ローカル電車に
飛び乗りし

冷房苦手と
次の駅で降り

路地通り 淑女の放つ
香水きんもくせいに

金木犀も
たじろぎて香り

(鏑木町 藤田 恭)

2月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いた

だいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等の修正をさせていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL 043-485-1801

〒285-0025 佐倉市鎗木町198-3

URL http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

さくら道

以前満開の桜の枝ぶりの一番良いのはどれかと、佐倉城址公園内を探し歩いたことがあった。

三の門跡近くの桜は、木が立て込みすぎてか、枝が光を求めて上の方に伸びきり、花も少なく寂しい感じがした。でも花見客は「花より団子」でシートを広げてお弁当を楽しんでいた。

それに比べて歴博近くの馬出し空堀の際の桜は、どこか

あとがき

いつも『なかま』のご愛読ありがとうございます。

2月に入り新しい目標に向け生活されていると存じます。首都直下地震の被害想定が出され、「生き延びる備え」を今年改めて考えていかねばならないと思いました。

『古今佐倉真佐子』の中で佐倉の地震の事を渡辺善右衛門が書き記しています。

「一か月三四度あり夜昼あり、

ら見ても盆栽をそのまま大きくしたようで見ごたえがあった。歴博の中からも眺められたが、それはその大きな窓硝子一面に、まるで一枚の絵を見るように堂々と美しかった。テレビに映るような有名な桜ではなくても、やはり姿のいい素敵な木に出会いたいと思うものだ。ともかく満開のあの桜は、毎年気になって見に行っている。

（押木 恭子）

十一月二十三日（元禄16年）夜八つ時（午前2時）夜明けまで七十五度揺れ十二月末まで続いた」と約300年前の地震の事でありませぬ。

現在減災に向けての取り組みが進められ、建物の耐震化、出火防止対策強化で被害が10分の1に減らせると発表されました。最低3日分の食糧、水1人1日3リットル、トイレの準備等、大地震に備えて、皆様備えを再度お考えでしょうか。

（小池 由美）